

五箇の莊詠抄

高濱 充

まなかひに坂はろばるとつゞきたり汗あえにつゝ吾がのぼり行く
坂越えて向つ山嶺に立ちわたる雲のうごきを見つゝいこへり

山峽深く行き暮れてやうやくにしてたづね出でし伐材所の假小屋に宿を乞へり
其の夜よもすがら暴風荒びしに、

山はぞま暴風すさぶ夜を柚人の家に更かして酒を欲りけり
この谷に夕かたまけてまなかひの嶽の峰より雲ゆりおろす
里遠き山路にあへばしたしもよ枯萱草を負ひたる山人
山かひのわづかの畑に山人は生きのたづきに稗を作れり
この谿に人住むらんか山なだり稗のはたけにたがやす農夫あり
大き杉並み立つ森のおくにして樹を伐る音の聞きのよろしも
天つ陽のとどかぬ森の中を行きて足うらにおぼゆる朽葉のしめり

冬の歌

佐藤 一雄

足袋はけば親の死に目に逢はずと云へど寒きこの夜は足袋はきて寝る

晴れゆくと思ひしに空のまたくもり風いでたれや木の葉さわげる
行きずりに仰げば寒し松なみ木夜風こもりて鳴り止まずけり
うすあかく芽ぐめる梅のしたしさや曇りほのぬくき軒の端に見ゆ
夜の風のあまりに寒くおのづからあゆみはかどり利心もなし

秋

詠

井上 縫三郎

山深み長門の峽肌寒し櫛の葉ははや黄ばみけるかも
渡場の夕べを雨のふりいで、枯葉をゆする風のざはめき
ひさぶくに牧場に來りゆえもなく乾草の香にしたしみおぼゆ
老ひし父さびしき母は如何ならむかくも静けく雨ふる夜は
せゝらぎの音はさむけし朝霧は深くこめたり白川の橋
電燈の光お暗らき停車場の朝寒けく人は黙せり
冬近き山峽の驛笛の音の遠くひゞきて霧うすれゆく
夕近き巷の音にまじりくるチャルメラの音はさびしかりけり